

「八甲田山死の彷徨」 新田 次郎 著 新潮文庫 1978 年 3 月 第 6 版発行

2 冊目の紹介で、すみません。推薦したい秀逸なノンフィクションがたくさんあって…というのは言い訳で、千数百字もの推薦文を書く力量がなかっただけです…。

私の場合、この話は映画が先でした。当時小学生で、背景やストーリーはよく理解していなかったと思いますが、とにかく強烈な遭難シーンに何度も驚愕し、文字通り身を凍らせ、そしてそれが実話に基づくものだと知って、「八甲田山」の名が強く脳裏に刻印されました。その後、大学時代に古本屋でこの本を見つけ、貪るように読み進めた記憶があります。

舞台は、日露戦争開戦を 2 年後に控えた 1902 年。対露戦の準備を進める弘前第八師団において、極寒対策や雪中行軍法等の研究のため、厳冬期の八甲田山を行軍するという人体実験を行うことになったのです。1 月下旬、弘前→八甲田ルートを踏破する「弘前第 31 連隊」37 名（+記者 1 名）と、青森→八甲田ルートを踏破する「青森第 5 連隊」196 名（+大隊本部随員 14 名）がともに行軍を開始するのですが、天候の悪化や指揮系統の混乱、案内人の不在といった状況下におかれた第 5 連隊は遭難し 199 名が死亡、一方の第 31 連隊も困難を極めますが、一人も犠牲者を出すことなく無事踏破、生還を果たします（南極点到達におけるアムンゼン隊とスコット隊のよう…）。

容赦無く襲いかかる寒さと吹雪に、食料を失い、感覚を失い、方向を失い、やがて正気を失っていく様が、臨場感豊かにこれでもかこれでもかと描かれています。新田次郎にハマる一冊になるかもしれませんが、どうか暖かくして読まれることをお勧めします。